

## 世界ラテン化におけるハイデッガーとデリダ

港道 隆

近代科学技術の支配、Gestell としての存在経験を存在史のエポックとして考え抜き、新たな存在経験のエポックを準備する中で、ハイデッガーは「最後の神」(『哲学への寄与』)を名指している。しかしその一方で彼は、思惟に信仰が入り込むのを徹底して拒んできた。以来、科学技術の支配は「ヨーロッパの世界化」によって広まり、1990年代からは「グローバリゼーション」の名前で呼ばれる現象となっている。ハイデッガーの問題提起を受け、ハイデッガーとの「対決」を通じて独自の思惟を鍛えてきたジャック・デリダは、それを「世界ラテン化」(mon-dialatinisation)と名づけた。それは「神の死の経験としてのキリスト教と遠隔科学技術資本主義との同盟」である。ハイデッガーの存在の思惟とデリダの脱構築とはどこで交わるのか？どこで別れるのか？「対決」はどのように起こるのか？

『知と信一単なる理性の諸限界における「宗教」の二源泉』においてデリダは、「宗教」には二つの源泉 (source) があると言う。「信じること」の経験と「無傷なもの」の経験である。第一の契機においては、ハイデッガーの「信仰の排除」が問い直されるであろう。哲学的思惟からさえ「信じること」を排除することはできるのか？排除しえないとしたら、そこから肯定的な帰結を取り出しうるのではないか？また第二の契機においては、ハイデッガーが「最後の神」からの Wink を受け取るための根本気分とする「慎み深さ」が問題になるだろう。だが、「慎み深さ」は「神」に限定される態度なのか？さらに、二源泉の組み合わせから何が見えてくるのか？

一つ一つの問いを精査するには、議論は錯綜したものになるだろう。今回は、大まかな標定しか叶わないが、討論のための問題提起にしたい。